慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ネストロイの喜劇に於ける滑稽な台詞の翻訳について：『場末の娘』を例にとって
Sub Title	Über die Schwierigkeiten bei der Übersetzung der Nestroys Possen ins Japanische
Author	江原, 吉博(Ehara, Yoshihiro)
Publisher	共立薬科大学
Publication year	1989
Jtitle	共立薬科大学研究年報 (The annual report of the Kyoritsu College of Pharmacy). No.34 (1989.) ,p.1- 19
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	原報
Genre	Technical Report
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062898-00000034-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

共立薬科大学
Ann, Rept. Kyoritsu
Coll. Phrm.

ネストロイの喜劇に於ける滑稽な台詞の翻訳について

――『場末の娘』を例にとって――

江　原　吉　博

○はじめに

ドイツ語とは言っても、一つの方言であるヴィーン訛、しかもそれを多用したネストロの戯曲を日本語に翻訳し、さらには舞台上演用の台本に仕立てようとする場合、克服しなければならない多くの問題を抱え込むことになる。

一口に翻訳と言っても戯曲の翻訳には、科学技術に関する著作や論文の場合とは違った問題のあることは言わずもがなとして、詩や小説、つまり文学テキストの翻訳とも少しく異なる困難がつきまとう。技術上の巧拙はここでは考慮の対象とはしないが、論理、というよりは話の筋の辿り方をとっても、文学テキストでは通常全てが文章として記されているのに比べ、戯曲のテキストは、場面間、さらには台詞と台詞のつながり具合をこちらが補って考えないと意味をつかみ損なう場合も出てくることになる。

しかし、ここで扱おうとするネストロイの戯曲においては、そうした一般論とは別に特殊な事情がいくつかある。まずその一つは、それが書かれた時代と場所の問題である。

ネストロイの最も成功した芝居は、ほとんどが1848年の三月革命を控えた時代、言うところの三月前期であり、その活躍の場もほぼその時代のヴィーンの街に限定される。従って当然の事ながら、当時のヴィーンの風俗や事件が台詞にも取り込まれていて、それらヴィーン事情に対する知識の欠如、あるいは不足が台詞の理解を困難にしている場合もある。そしてまた、これはやはりヴィーンという街に深く関わることだが、冒頭でも触れたように、ネストロイの巧みに駆使する訛が、その街に生まれ育った訳でもなく、またドイツ語を母国語とする訳でもない我々異国の人間にとって、その本当の滑稽さや、それによって生ずる茶化しや、皮肉の面白さという点で隔靴掻痒の憾があることは否定できない。オリジナルのテキストを読んでさえ解らないことが日本語に移せよう筈もない。これは、現在ヴィーンで上演されているネストロイ物を見て痛感し、絶望的な思いに駆られることだが、周囲の人が笑い、吹き出しているところで、その部分は何度も読んでいる筈の自分だけが取り残されるということが幾度となくあることだ。その原因としては、恐らく、滑稽さが言葉の表面上の意味にではなく、裏の意味とコンテクストとのずれとか、あるいは発音上の微妙な違いが観客の意識に及ぼす何か、例えば我国でもよく使われる手だが、ある訛によってひどい田舎者を連想させたり、ある言い回しによってその人物の愚かさ加減を暴露させるようなことがよくあるようにそうした何かが観客をどっと笑わせるのだろうが、それが外国人には容易に判らないということが考えられる。

とりわけネストロイは方言とか訛を多用した劇作家であるが、文字として遺された戯曲を読む限りでは一見殆ど普通の表記と変わらないドイツ語であって、いくらか特殊な語彙についてもヴィーン語辞典などからその意味を推定することはおおよそ可能であり、テキストの意味をとることはそれほど簡単ではないにしても、決して不可能ではない。しかし、演じられた芝居を観、録

音されたレコード、テープ類を聞くと印象はガラリと変わってしまう。端的に言って、まず聞き取れない。これでもドイツ語？　というのが最初の印象だろう。もちろんその印象は慣れによってだいぶ変化する。何カ月か、あるいは何年かヴィーンという街に滞在し、土地の人々の言葉に耳を傾けている内に理解の度も深まっていく。

しかし例えば、イタリアの古い即興劇として知られるコメディア・デラルテに関して、コンスタン・ミックが述べる次のくだりは、そのままネストロイを始めとするヴィーン民衆劇の多くの作品にも当てはまることである。

「人々は、他所の者より何でもよく知っていると思い込んでいるボローニャの住人を笑った。それで、ドットーレ（博士）という漫画的な人物をボローニャ人にした。都会人は農民、特にベルガモあたりの田舎者の愚かさと言葉づかいの汚なさを馬鹿にしていたので、ザニン（道化：筆者注）たちにその集約的な典型を見つけて楽しんだ。その一方で、イタリア統一への衝動は、まず理想的なイタリア語の探求において表れた。人々は大いにそれに興味をしめし絶えず熱心に議論した。そのことがさまざまな方言に対する好奇心をふたたびよみがえらせ、方言の欠点や喜劇的な側面をよりよく感じさせることになった。」[1)]

よく知られるように、ヴィーンはいまでこそヨーロッパの一小都市に成り果てたとは言え、かつてはハプスブル帝国の首都、ネストロイの活躍した十九世紀中葉にも、様々な人種が入り乱れて生活していた都市である。バイエルン、オーストリアの諸方言はもとより、チェコ人、ハンガリー人、スラブ人、それにユダヤ人といった具合で、それらの諸言語諸方言が混じり合い、反目し合って形成されたのがヴィーン訛という特殊な言葉である。とは言うものの、そこは芝居の事、それらを生の形で舞台に載せたのでは全ての観客に解ってもらう訳には行かない。当然ネストロイはヴイーン訛そのままではなく、誇張するところは誇張し、薄めるところは薄めて、誰にも大方の理解が可能なように変えていた筈である。現在遺されている戯曲は、そうした一番標準的なテキストであろうが、戯曲はさらに実際の上演地やその日その日の諸事情によっても少しずつは変化する代物と来ている。もちろん翻訳に際しては、そのようないわば即興的な部分は度外視するほかないのだが、即興と言うことに関して言えば、ネストロイの場合どうしても避けて通れないことが一つある。それは検閲の問題である。当時の公権力、とりわけ風紀警察は、舞台上で役者の喋る台詞についてうるさく干渉していた。ネストロイなどはそれでも興に乗れば密偵が観客に混じっているのもものかは、修正要求の出ていた台詞をもとのまま使って、幾度となく放り込まれたということである。そうした台詞の多くは現代ではもう目にし耳にすることの出来ないものであるが、検閲によって修正を余儀なくされたオリジナルの台詞が残っているものも幾つかはあって、それを読んでみても現代人の感覚では一体どこが問題なのか最早理解できないところも多いのである。幸いここで実例として取り上げる『場末の娘』には、そうした箇所はみられないが、訳者としてみれば検閲に引っかかった台詞は、何とかそれらしく訳してみたいという気持ちも強く、悩みの尽きない点である。

もう一つ翻訳上の大きな問題。それは夥しい量にのぼる酒落または駄酒落、地口、言葉遊び、詭弁、屁理屈、機智縦横な風刺の類である。もちろんそのまま日本語に移して通じるものもないではないが、話の筋を曲げずにその面白さを生かすのは不可能なものもあり、そのため似たよう

な趣向の台詞をひねり出すか、それも出来なければ当り前の日本語にして涙を飲むかしかない。実際翻訳（試訳）に当たってはそうせざるを得なかった箇所も多く、それについては以下の本論で実例を示したうえで、もし名案、妙案のある方には是非とも御教示を賜りたい。

以下『下町の娘』の粗筋を紹介した上で、原文を引き翻訳の可能性につき考察を加えてみたい。

○あらすじ

三幕構成のこの芝居の第一幕は、フォン・カウツ氏宅の豪奢な部屋。氏の姪に当たる二十六歳の未亡人フォン・エアプセンシュタイン夫人の二度目の結婚の婚約式当日である。この日のためと装いを凝らした夫人が待ち草臥れるのもよそに、婚約者のフォン・ギグル氏はいっこう現われる気配もない。女中や叔父のカウツ氏に散々当たり散らしていると、この家に出入りする世話人というか、探偵というか、その名もシュノフェルル（Schnoferl くんくん嗅ぎ回る人）と言う中年の独身男が現われ、三人で結婚についてあれこれ議論する。特にこの辺りは、ネストロイ演じるシュノフェルルが、得意の屁理屈をこね回して観客を自分の世界に引き込もうと言う所でもあり、筋の伏線を敷いている所でもあって、その言葉によるアクロバットは見事なものだが、それは後に回し、芝居は、シュノフェルルがカウツの「場末」（この原語は die Vorstadt つまり、城壁に囲まれたヴィーンの街の外側に地方からやってきた流れ物たちが住み着いてつくっていた場末の街）での女漁りをとがめているところに、ようやくフォン・ギグルがやってきて、カウツのいなくなった隙に、シュノフェルルに向かって、新しい恋人の出来たことを打ち明けて助けを求める。要するに、夫人の怒りを買わずに何とかうまく婚約を破棄し、新しい相手と結婚したいと言うのである。秘かに夫人に恋焦がれるシュノフェルルは、何ともったいないことを、とギグルに考え直すように説得するが、夢中になっているギグルの聞き入れる由もない。

一方、薄々事情を悟った夫人には、シュノフェルルがここでも、得意の屁理屈を駆使して宥めにかかる。

そうこうする内にやって来たのがテクラ。夫人になにやら刺繍の仕事を依頼されてやって来たらしいこのお針子が、実はギグルの思いを寄せる女である。目敏く彼女を見つけたギグルは、突然引っ越して居所も教えてくれない彼女に、その理由を言ってくれるよう迫るが、そこにカウツ氏とシュノフェルルが現れて、その場に居たたまれなくなったテクラは逃げるように帰って行く。彼女の姿を観たシュノフェルルの頭にはあることがひらめき、カウツはカウツで早くもテクラに食指を動かす。婚約書に署名を求められたギグルは絶望してその場に気を失って倒れ、やって来る証人や祝いの客たちの手前都合の悪くなった夫人も気絶した振りをして、てんやわんやの内に第一幕は終わる。

第二幕は、場末のとある下着商の仕事場。お針子たちがやかましく仕事をしているところに、シュノフェルルがギグルをともなって現れる。シュノフェルルにとっては馴染みらしいこの界隈で、「山と積まれた」若い娘たちをギグルに見せて、テクラに幻惑されている彼の目を覚まさせようと言う魂胆である。シュノフェルルがギグルに、何か気の利いたことを言わせようと骨を折る内、中年の未亡人で下着商の妹、マダム・シュトヒル（原語では Storch は「こうのとり」を意味し、ぎすぎすした人間のイメージがある）が、変な中年男に跡をつけられたと言って逃げ込んでくる。男は図々しくも、家まで入り込んで来たという。そういう間にも、ドアを開けて中を

覗おうとした男をシュノフェルルとギグルが帽子で顔をスツポリ覆ってしまって懲らしめるドタバタが入る。帽子をとってみれば、なんとカウツではないか。テクラを追って来たのか、ともかく女漁りの最中をカウツはとんでもない二人に見つかってしまったものである。

しかし、何はともあれお互いが知合いどうしと判って、いっそのこと楽しいパーティでもということになり、皆忙しく準備に取り掛かる。シュノフェルルはケーキを作り、カウツは買物を引き受け、といった具合に右往左往するうちに、マダム・シュトルヒが、同じ建物に住むテクラを、今日こそは仲間に加えようと説得して連れて来る。思いがけず現れたテクラの姿に驚いてコーヒー豆をぶちまけるギグル、テクラもようやく身の上を打ち明けようと決心したところにシュノフェルルが現れ悪態をつかれ、周囲の喧騒の中で独りうちひしがれているところに、テクラの事を調べていたフォン・エアプセンシュタイン夫人が現れ、宴会はぶち壊しになって混乱の内に第二幕は幕となる。

第三幕はヴィーン郊外にあるカウツの別荘の庭である。招待を受けた下着商とお針子たちが、用足しに出かけて帰らぬ主人を待って、腹たち紛れに花壇を荒らしてやろうと相談している。ようやく帰って来た主人を鬼に、皆は「目かくし鬼さん」の遊びを始める。一向に捕まえられないどじな鬼を相手に喜んで逃げ回っている娘たちの独りが、椅子にかかっていたカウツの上着を隠してしまおうとして、ポケットの中の分厚い紙入れを手に入れる。

目隠しをしたカウツが独りで皆を探してうろついているところに、フォン・エアプセンシュタイン夫人が現れる。独りで遊んでいたところだと苦しい言い訳をする叔父の態度を訝りながらも、勧めに従って家の中に入る夫人。入れ替わりに入ってきたのはギグル。実は二人とも、ある魂胆からシュノフェルルが呼び寄せたのである。呼び寄せたのが二人だけでなく、テクラもまた近くの農家でシュノフェルルを待っていることが、やがて集まってきた娘たちの口から知れる。シュノフェルルは夫人とギグルの婚約を平和裏に解消し、テクラとギグルを結婚させようと目論み、そのために必要なテクラについての何か重大な秘密を嗅ぎつけたらしいのでる。

夫人はシュノフェルルとギグルの案ずるに相違して、テクラとのことを寛大に恕し、のみかはテクラに同情を寄せ始めてさえいる。テクラが実はカウツの金庫番で大金を盗んで逃げたとされるシュティマーの娘であることをほぼつきとめたシュノフェルルは、父親のぬれぎぬを晴らすことのできる証人に会うためその日の朝出掛けたのだったが、ひとあし違いで肝心の男に旅立たれてしまい、会えなかったと言うのだ。せっかく戻り始めた夫人のシュノフェルルに対する信頼も再び危うくなりかけたとき、シュノフェルルの手に回り回ったカウツの紙入れが転がり込む。持ち主を確かめようと、出てきた手紙を読んでびっくり、なんとそれは旅に出てしまって会えなかった事件の生き証人ケーファーに宛てた物ではないか。しかもそこから読み取れるのは、事件はカウツの仕組んだ芝居だったということである。カウツはシュノフェルルの機転で名誉を失うことはなかったものの、懲らしめのために、盗られたことにして隠してあった金を結局みんなに分けてしまわなければならないことになる。最後に幾組かの結婚が成立するのは、民衆劇の常套手段である。

筋立てだけを見れば、どうと言うことのない探偵劇であるが、この芝居の面白さは、既に何度も言ってきたように、あくまで台詞にある。とりわけ、ネストロイの演じたシュノフェルルの台詞と、それに加えるに劇中で歌われる唄の文句に、世俗の風刺を絡めた独自のおかしさがある。以下では、そのような台詞を、1. 言葉遊び（酒落、駄酒落、地口の類も含む）2. 詭弁、屁理

屈の類　3. ヴィーン事情に関するもの、に大きく分類して見て行くことにする。

○分類1．言葉遊び

其の1．

幕開き直後、婚約式のための品物を届けにきた商人たちと支払いをするカウツ家の奉公人のやり取り。厚かましいリベート請求にたいし、いや味を言われて奉公人の言い返す台詞がある。

K r ä m e r. Das versteht sich von selbst, wir wissen schon, was sich g'hört! Daß uns der Herr Dominik immer dran erinnert, is etwas $_1$schmutzig.

D o m i n i k. Konträr, das is sehr reinlich, denn ich halt' drauf, $_2$daß eine Hand die andere wascht! Jetzt b'hüt' Ihnen Gott allerseits! [2)]

1の「汚い」にたいして、2は「一つの手で別の手を洗う」ように心掛けているからきれいなことだ、ということだが、2には、諺として「世の中は持ちつ持たれつ」の意味がありそれを踏まえての地口である。従って、

クレーマー：そりゃ当然ですとも、そこんとこはちゃんとわきまえておりますとも。それをいつも思いださせようなんて、ドミニクの旦那、ちょっと汚かないですか。

ドミニク：とんでもない、そりゃあ大層清らかなことですよ。何しろわたしゃいつも、持ちつ持たれつって考えているんですからね。さ、あんたがた、どなたさんにも神様の御加護がありますよう。

しかしここで問題となるのは、日本語の「持ちつ持たれつ」には「きれいな」という意味連想は全くない。従って、「何しろ」という表現は論理的にもまずいし、少しも滑稽さが出ていない。ここで言う「持ちつ持たれつ」の原議は、「お互い手を洗ってやる」と言うことで、リベートのやりとりを問題にしたこの箇所からすると「お金」即ち「汚いもの」という、恐らくは日本的な連想をここでは利用すべきかも知れない。例えば、「何しろわたしゃいつも、あんたがたの手に貯ったお金という垢を洗い流して差し上げたいとボランティアの精神でいるんですからね。」とでもしたらどうだろうか。

其の2．

I幕3場。いつまでもやって来ない婚約者のギグルを待って苛立つフォン・エアプセンシュタイン夫人と女中のナネッテの会話。

N a n e t t e. Ja, ja, seine Nachlässigkeit verdient allerdings einen kleinen $_1$Putzer.

F r a u　v o n　E r b s e n s t e i n. Was? Einen kleinen $_1$Putzer nur verdient das, daß er mich im größten $_2$Putz vernegligiert? [3)]

1には、俗語として「叱責」の意、2には「盛装」の意味がある。言葉遊びを生かそうとすれば、さしずめ、

ナネッテ：えゝ、えゝ、あの方のだらしなさには、確かに小言もいいたくなりますわね。
夫人：何ですって？　小言で済むですって？　わたしにこんな大ごとさせたまま放っておいて。

其の3.

Ⅰ幕7場。シュノフェルルに場末での女漁りを見とがめられたカウツは何とか言い繕ってとぼけている。それを見たシュノフェルルの台詞。

S c h n o f e r l. Na, so hab' ich Ihnen verkennt, aber der Taille nach waren Sie's! Übrigens, Schönheit bleibt Schönheit, und wenn die Schönheit auch auf einem $_1$Grund wo draußt is, so is das noch kein $_2$Grund, sie gering zu schätzen.[4)]

Grundには、「土地」と「理由」という二つの意味がある。1はauf einem Grund wo draußtでもって「どこか外の土地」つまり、ヴィーンでは場末(Vorstadt)のことを表し、直訳すれば、「たとえ場末の美人だからといって、その美しさを低く評価する理由にはなりません。」となる。これでは言葉の両義を用いた遊びを生かすことは出来ない。

ついでに、Grundを使った言葉遊びの例をもうひとつ。Ⅰ幕16場、自分にすげない態度をとるテクラに向かってギグルの言う台詞。

G i g l. Lügen S' nit, Sie können mich nicht leiden! D e r $_1$Grund kommt mir viel $_2$gründlicher vor.[5)]

「あなたにつれなくするのは、二度と会ってはならないからです。それが理由です。」というナネッテの言葉を捉えて、「嘘をつくな、僕が嫌いなんだ！　そっちの理由の方が僕にはずっと根深いものに思える。」と言うのだが、この訳では何の事か解らない。1は「理由」、2はもともと「底」とか、「基礎」の意味のGrundから派生した言葉である。しかしこの台詞にはそうした意味内容を越えた、いわば感覚的に直感すべきおかしさがある。これは、このまま日本語にするのは不可能ではないだろうか。

其の4.

Ⅰ幕8場、ようやくやってきたギグルは夫人が待ちぼうけをくわされお冠なのを知ってビクビクしている。それを見たカウツは、やさしくしてやって機嫌を直さない女なんていないと言う。そんなカウツの言葉を捉えて、シュノフェルルの言葉遊びが続く。

K a u z. Ich mach's wenigstens immer so, und wenn ich zärtlich werd', da is jede $_1$weg!
S c h n o f e r l. Oder wünscht wenigstens, $_2$weg zu sein! Gigl, wenn man $_3$verstimmte Frauen, notabene solche, die nicht auf Präsenten anstehen, $_4$umstimmen will, so g'hören zwei

$_5$Stimmschlüsseln dazu: der eine heißt: Imponieren, der andere: Niederknien.[6)]

1は「ぼっーとなる、夢中になる」、2は「行ってしまう、逃げ出す」の意味で使われている。3、4、5はそれぞれ、楽器の調律に関する語彙で、「調子が狂う」、「調子を直す、調律する」、「調律用のキィー」の意味であるが、ここでは女性の機嫌を楽器に例えている。以下直訳。

カウツ：少なくともわしはいつもそうしてきたよ、優しくしてやればみんな夢中さ。
シュノフェルル：少なくとも、逃げ出したいと思ったかも。ギグル、機嫌を損ねて、贈物でも効き目がないような女の機嫌を直すには、二つのやり方しかないよ。高飛車に行くか土下座するかだ。

しかしもちろんこれではオリジナルの面白味は台無しになっている。これも何かうまい言い方はないものだろうか。

其の5.
Ⅰ幕12場。ギグルと夫人との仲を取り持つために、夫人に対する自分の気持ちを犠牲にしようと決心するシュノフェルルの台詞。

Schnoferl (*für sich*). Ich habe mit Selbstaufopferung zugunsten des Freundes gehandelt. Tröste dich, Schnoferl, mit dem Bewußtsein und denke: Die edelste $_1$Nation unter allen $_2$Nationen is die $_3$Resignation.[7)]

説明するまでもなく、見ての通り、或は聞いての通りと言うべきか、極めて単純な語呂合わせである。2は1の複数形であるが、1と3との間には、sein動詞で結ばれている主語と補語でありながら、論理的な関係は全くない。念のためこの部分のみを逐語訳してみると、「あらゆる民族の内で最も気高き民族は諦めである。」となる。この訳だけを見ていくら頭を捻ってみても得るところは何もないだろう。例えば、「あらゆる想念の内で最も気高き想念は残念ながら諦念である」とか言う具合に、コンテクストのうえで肝心なのは、「諦め(Resignation)」を生かすことである。

其の6.
Ⅱ幕2場。シュノフェルルは、ギグルのテクラに寄せるおもいを覚まさせようと、若い女たちが沢山いる場末の縫製場に彼を連れ出す。表のカフェに彼を待たせておいて、シュノフェルルは一足先に娘たちの所に顔を出して、予めギグルの事を話している。興味を抱いた娘たちの一人がギグルの容貌の事を聞きただす。

Rosalie. Is er vielleicht recht $_1$schiech?
Schnoferl. $_2$Schiech, unendlich $_2$schiech über sein Schicksal.
Sabine. Wir meinen sein Äußeres, is das schön?[8)]

schiech は方言で、häßlich：醜い、と zornig：怒った、の両義に使われる。ここでも、1 は前者、2 は後者に使い分けている。以下訳。

ロザーリエ：もしかしてその方、かなりブスなんじゃない？
シュノフェルル：ぶすっとしてますよ、そりゃあもう、自分の運命にこれ以上ないほどぶすっとしてますよ。
ロザーリエ：あたしたちが聞いているのは外見のことよ。美男子なの？

其の7.
やはりⅡ幕2場。女性にふられたと聞いてギグルのことを軽蔑し始めた娘たちに、彼が金持ちだということを付け加えると途端に興味を示し始めたのを見て、シュノフェルルの台詞。

S c h n o f e r l. Wie g'schwind sich 's Mitgefühl zeigt, wenn so ein $_1$armer Mensch $_2$reich is![9]

2 は「金持ち」の意味だが、1 には「哀れな」と「貧しい」の両義がある。ここでは、、意味上は当然前者だが、「貧しい」と「金持ちの」という対比は意識されている。しかし、コンテキストを曲げないためには、結局以下のようにするしかないだろう。

シュノフェルル：これだよ、ふられるような貧相な男でも、金持ちと聞けばすぐ手のひらを返すんだから。

其の8.
Ⅱ幕7場。マダム・シュトルヒを追って下着屋に入り込んだカウツは、待ちかまえていたシュノフェルルとギグルに不意打ちを食らわされて、自分の帽子を首までスッポリかぶせられ、目隠しされたような格好になる。
しかし、その男がカウツだったと判ると、ギグルは責任をシュノフェルルにかぶせて逃げようとする。その台詞の中にもちょっとした言葉遊びがある。

K a u z (*aufgebracht zu Gigl*). Und du hast dich unterstanden -
G i g l. Ich bitt' um Verzeihn, ich hab' Ihnen nicht aus eigenem $_1$Antrieb den Hut $_2$angetrieben, (*auf Schnoferl deusend*) von dem is diese Idee.[10]

2 は、antreiben「駆り立てる、せきたてる」という動詞の過去分詞だが、普通、帽子と言うものに対してなされる動作には使わない。それを敢て使ったのは、1 の、aus eigenem Antrieb「自発的に」の発音に引っかけてのことである。

カウツ：(怒って、ギグルに)おまえさんは、なんてあつかましいことを・・・
ギグル：どうぞお許し下さい。ハットでハットさせるようなやり方は、僕じゃなくて、(とシュノフェルルを指して)この男がハット想い着いたんですから。

当然、シュノフェルルも言い訳をしなければならない。これがまた、通り一遍ではない。

S c h n o f e r l. Oh, ich bitt', diese Idee is nicht neu und wahrscheinlich $_3$mit der Erfindung der Hüte selbst von gleichem Alter.[11)]

シュノフェルル：あゝ、とんでもない。この着想は独創なんかじゃありません。恐らく帽子と同じくらい陳腐なものですよ。

ここで、下線3を逐語訳しなかったのには理由がある。ドイツ語には、Diese Methode ist ein alter Hut. という言い回しがあって、下線3は、それを踏まえた台詞とおもわれる。但し、これは筆者の思い付きに過ぎず、思い過ごしかもしれないが。

其の9.

Ⅱ幕14場。思わぬところに現れたテクラに驚いたギグルは、持っていたコーヒーミルを落としてしまい、コーヒー豆が床に散らばる。そこで、ギグルの言う台詞。

G i g l. Thekla! (*Läßt die Kaffeemühle fallen, daß Kaffeebohnen herumrollen.*) Da hab'n wir den Kaffee![12)]

逐語訳は、「テクラだ！（とコーヒーミルを落とし、豆が散らばる）こいつはコーヒーだ！」となるが、はて何の事か？

Da hab'n wir den Kaffee! は、Da haben wir die Bescherung. つまり、「こいつは困ったぞ」と同義で、テクラに会って不都合なことを、コーヒーをこぼしてしまったことにかこつけていったもの。従って、後者の仕草を頭に置いて日本語でこの状況を表現するとすれば、「こいつぁお手上げだ」くらいだろうか。

其の10.

Ⅱ幕18場。自分がこねたお菓子を焼いてくれるよう頼んでおいた娘が、急いで走りよって来るのを見たシュノフェルルは、娘に向かって、自分のお菓子がおかしな事になったのではないかと心配で尋ねる、そのやりとり。

P e p p i. Er geht gar nicht, mir scheint, er wird, was man sagt, ein $_1$Dalk bleiben!

S c h n o f e r l. Wie unzart! Wenn einer einen $_2$Dalken erzeugt hat, muß man es ihm nicht ins G'sicht sagen, das tut weh![13)]

Dalk には、1. 出来そこないのパン、と 2. のろまな人間、の両義がある。そこで、

ペピー：駄目ねー。どうやら、よく言う、「出来損ない」らしいわね。

シュノフェルル：なんて思いやりのないことを！出来そこないを生んだ人間に、面と向かってそ

れを言うなんて！　傷つくなー！

其の11.

次の例は、単純に言葉の遊びと言ってしまえない、むしろ、詭弁、屁理屈の部類に入るべきかもしれないものである。

Ⅲ幕11場。エアプセンシュタイン夫人に、ギグルの件は心に関わる問題なので許してやってほしいと、シュノフェルルが頼むところで、それじゃ、心に関わることなら何でも許すべきなのかと夫人に詰め寄られて、シュノフェルルの苦しい言い訳。これは、Herz「心」と「心臓」の両義を利用しての詭弁である。

S c h n o f e r l (*leise zu Gigl*). Halt's Maul! (*Laut zu Frau von Erbsenstein.*) Die Anatomen schon lehren uns, daß das kleine menshliche $_1$Herz zwei verschiedene $_2$Kammern hat, und wir sehn ja an den größten Ländern, was durch die Verschiedenheit der $_3$Kammern für Konfusionen entstehen; ferners zeigen uns die Anatomen, daß das $_4$Herz $_5$Ohren hat, und zwar verhältnismäßig sehr $_6$große Ohren! Dadurch allein schon ist jede $_7$Eselei, wo das $_8$Herz im Spiel is, zur Vergebung qualifiziert.[14)]

2の「部屋」とは、心臓にある二つの部屋、「右心室」と「左心室」のことだが、3は、議会における二つの部屋、つまりわが国ならさしずめ、「衆議院」と「参議院」のことを指している。ここでは、両院の食い違いが大国ではしばしば収拾のつかない混乱を引き起こす事を皮肉っている。

5は、心臓にある耳、即ち、「心耳」のこと。それが不釣合いに大きいことから「ロバの耳」を連想させて、7の言葉、つまりEsel（ロバ）の派生語へと繋げてゆく。

逐語訳。

シュノフェルル：（小声で、ギグルに）黙れよ！（声を高めて、夫人に）以前より解剖学者の教えているところですが、人間のちっぽけな心即ち心臓にはいわば参議院、衆議院というような二つの異なる部屋があります。部屋の食い違いがどれほどの混乱を引き起こすかは、超大国でよく見かけるところではありませんか。さらに、解剖学者が示すところでは、心臓には耳がありしかもロバのように不釣合いに大きい耳だというではありませんか。それだけでも既に、心に関わる馬鹿げた行いには許されるにたる愛嬌があるというものです。

この台詞の裏には、ひょっとしたら当時の時事的な話題でも含まれているのかもしれないが、ここは、思い切って日本語に引き付けて、例えば、「心臓には二つの別々な心室があって、寝室の取り違えがふた組の夫婦の間に如何なる混乱を引き起こすかは、もうよくご承知でしょう。さらに、解剖学者の知見に依りますと、心室の壁には耳があって、これが聞くまいとしても聞こえてしまう仕様のない耳だというではありませんか。このこと一つをとっても、男女の心に関わる問題は許すしか仕方ありません」とでもしたらどうであろうか。

さらに、すぐそれに続く台詞。ここにも、vergebenという動詞の両義を利用した言葉遊びがみられる。

Frau von Erbsenstein. Der Herr Schnoferl find't also das ganz leicht, wenn man beleidigt, gekränkt ist, zu $_{9}$vergeben. Haben Sie's schon versucht?
Schnoferl. O ja, ich hab' einmal ein' Kater $_{10}$vergeben, der hat mir drei Kanarienvögel g'fressen.[15)]

夫人：それじゃ、シュノフェルルさんは、たとえ侮辱され、傷つけられてもゆるしてやることは簡単なことだとお思いになるのね。ご自分はそうなさったことがおあり？
シュノフェルル：以前わたしのカナリアを二羽もくっちまった猫を許してやったことがありましたよ。

このままでは別にどうと言うことはないのだが、vergebenには許すとともに、「毒殺する」という意味がある。そこで、「猫を許してやった」ではなく、「猫に尾頭付を振舞ってやりましたよ、ただし毒入りのね」、とでもして、後は役者に片目をつぶらすくらいにしたらどうだろう。

其の12.
Ⅲ幕14場。以下は、実に単純な駄酒落。但し、それをそのまま日本語に移すことは、これも不可能。

Schnoferl. . . . Sie sind das Omlett, was ich unsichtbar um den Hals getragen und so mich stärkte in jeglicher Gefahr![16)]

これは、最後にはシュノフェルルたちの案に相違して寛大になったエアプセンシュタイン夫人の事を、かねてよりの崇拝者だったシュノフェルルが賛嘆して言う台詞である。下線はオムレツとなっている。が、しかしここは本当は、Amulett（発音はアムレット、意味は「お守り」)というべき所である。

シュノフェルル：・・・あなたは、私がいつも首の回りに下げていて、危険な目にあったときは勇気を与えてくれる目に見えないオムレツです！！？？？

さてどうしたものか？オムレツを「お守り」に換えただけでは駄酒落は少しも生きない。「お守り」の言い間違いだと言うことがピンとくるよい言葉はないものか。

其の13.
芝居も結末に近づいたⅢ幕18場。盗まれた筈の金が、実はカウツ自身が隠していたのだと露見してしまい、あれは隠したのではなく置き忘れていたのだと苦し紛れの弁解をするカウツ。その様子を見て、シュノフェルルが助け船を出して曰く、

S c h n o f e r l. Sehen Sie, an seinem $_1$verlegnen G'sicht sieht man's, daß das Ganze nur $_2$verlegt war.[17)]

1 は verliegen の過去分詞で「当惑した、狼狽した」の意味。2 は、verlegen の過去分詞で、「置き忘れた」の意。発音の相似を利用した語呂合わせである。

直訳すれば、

シュノフェルル：御覧なさい。あの困り果てた顔からして、どうやらあれはやっぱり置き忘れただけらしい。

ここは、カウツに対する皮肉の意味も込めて、いっそのこと、「あの間の抜けた顔からして」とでもしたらどうか。

○分類 2．詭弁、屁理屈。

其の 1．

I 幕 7 場。どうやら金を盗んで逃走したシュティマーのことで、何やら嗅ぎ回っているらしいシュノフェルルの様子に、もうあれは済んだ事、これ以上何を詮索する必要があるんだと牽制するカウツに、シュノフェルルがお得意の屁理屈を捏ねる。

S c h n o f e r l. Was weiter? Rechnen Sie die verlor'ne Ehr' für gar so ein' klein' Verlust? Freilich, 's gibt Leut', denen die Ehr' nicht ganz zwei Groschen gilt -

K a u z. Ah, das wird wohl bei niemandem der Fall sein.

S c h n o f e r l. O ja! Vorgestern spielen zwei in Kaffeehaus miteinander Billard, d' Partie um a Sechserl. Einer verliert etliche Partien, sagt er: ›Ah, das Kommt mir z' hoch, wir spielen s' jetzt bloß um die Ehr'‹, ein Zeichen, daß der die Ehr' nicht ganz auf zwei Groschen taxiert.[18)]

シュノフェルル：これ以上なにを、ですって？　あなたは、失われた名誉をそんな僅かな損失だとお考えなんですか。そりゃ、名誉なんて三文の値打ちもないと言う人もいるかもしれませんがね・・・

カウツ：まあ、そんな人間もおらんだろうが。

シュノフェルル：いやいますとも。おととい、二人の男がカフェでビリヤードをしていました。一勝負が銀貨一枚です。いく勝負かに負けた方の者が、「あゝ、俺にゃもうびた一文もない。残っているのはもう名誉だけだ」と言っておりました。これは、その男が名誉を三文の値打ちもないと考えている証拠じゃありませんか。

其の 2．

同じく I 幕 7 場。場末での女漁りを見とがめられたカウツは、シュノフェルルに、趣味はもっと高尚だとうそぶく。そこでシュノフェルルが、

S c h n o f e r l. . . . Auch unter die Spenserln schlagen die Herzen auf eine sehr beglückende Weise und auch die $_1$niedre Volée hat $_2$hohe Genüsse aufzuweisen.[19)]

1は「低い」、2は「高い」で、ここにも当然ちょっとした言葉遊びがある。

シュノフェルル：きつきつの胴着に押さえつけられていたって胸の高鳴ることはあるでしょうし、胸のはずみ方が多少低くとも、喜びはまた格別高いということもあるものです。

其の3.

Ⅰ幕11場。エアプセンシュタイン夫人に、婚約者のギグルが他に女でも作ったのではないかと問いつめられて、遠回しに肯定するところ。

S c h n o f e r l. . . . Seit Erfindung der elastischen Strumpfbänder hat das aufg'hört, jetzt kann einem Frauenzimmer nicht einmal 's Strumpfbandl mehr aufgehn.[20)]

逐語訳。

シュノフェルル：・・・伸縮自在な靴下止めが発明されてからというもの、例の迷信も言われなくなってしまいましたし、いまじゃもう、御婦人の靴下止めが緩むなんて事もないでしょうが。

レクラム版に付けられている Mautner の注によると、靴下止めが緩むと恋人が浮気をしている、という俗信があったそうで、この台詞もその俗信を踏まえたものである。

其の4.

やはりⅠ幕11場。上のやり取りに続いて、シュノフェルルがとうとう夫人に、ギグルが場末の娘に恋をしていることを認める台詞。さらにそれがほんの出来心に過ぎないことを滔々と弁じ立てる台詞である。

S c h n o f e r l. Kinderei, Dummheit, Irrtum! Er hat in der Zerstreuung sein Herz für a Haub'n ang'schaut und hat's in Vorbeigehn zu einer Haubenputzerin geben.

F r a u v o n E r b s e n s t e i n. Also ein Liebesverhältnis? Wart', du undankbarer Duckmauser – jetzt is es aus auf ewig!

S c h n o f e r l. Aber, gnädige Frau, das is ja nicht so, wie Sie meinen! Sie legen viel zu viel Wert in die Sache! Es is nur so eine Mamsell Thekla, sonst hat s', glaub' ich, gar kein' Namen. Wenn es sich um so Mädln, Haubenputzerinnen, Nähterinnnen, Seidenwinderinnen etc. handelt, da heißt dieser chemische Herzensprozeß nicht einmal ›Liebe‹, da wird das Ding nur ›Bekanntschaft‹ genannt, und mit dem veränderten Namen entsteht auch in der Sache ein himmelweiter Unterschied. Bei der Liebe nur wird man bezaubert, bei der Bekanntschaft, da

sieht man sich gern; bei der Liebe nur schwebt man in höheren Regionen, bei der Bekanntschaft geht man in einen irdischen Garten wohin, wo 's Bier gut und 's kälberne Bratl groß is; bei der Liebe nur heißt's: ›Er is treulos, meineidig, ein Verräter!‹, bei der Bakanntschaft heißt's bloß: ›Jetzt hat er a neue Bekanntschaft gemacht.‹ Die Liebe nur hat so häufig einen Nachklang von [1]Zetermordio-Geschrei der Eltern, bei der Liebe nur krampeln sich Familienverzweigungen ein in alle Fasern unserer Existenz, so daß oft kein Ausweg als Heirat bleibt; bei der Bekanntschaft wird bloß ein Zyklus von Sonntäg' - Maximum: ein ganzer Fasching - prätendiert, ewige Dauer is da Terra incognita, und lebenslängliche Folgen sind da gar nicht modern.[21)]

1は、もともと「助けて！人殺し！と叫ぶ声」のこと。ここでは、「悲痛な叫び」。

シュノフェルル：ほんのお遊びですよ。馬鹿げた過ちですよ。あの男は気晴らしに自分の心を帽子と見なして、通りすがりにある帽子磨の女の所に預けたんです。

夫人：それじゃ色恋沙汰ですね。いいわ、あの恩知らずのお追従者。もうおしまいだわ、金輪祭。

シュノフェルル：待って下さい、奥様。そうじゃないんですよ。あなたは事を重大にとりすぎてます。テクラとか言うだけで、他にまともな名前もないんだと思いますよ。こう言った、帽子磨きとか、お針子といった娘が相手だと、このての心の化学変化も、「恋愛」なんぞとは言わず、「お知合い」としかいわんのです。呼び方が違えば、中身もまた天と地ほどの違いがあります。うっとりと魔法にかけられたようになるのは「恋愛」の場合だけで、「お知り合い」じゃ会えば嬉しいという程度。想いが空をかけるのは「恋愛」の場合だけのもの、「お知り合い」じゃ足が宙をさまようこともなく、せいぜいビールがうまくて大きな子牛のローストが出るそこらの店に入るだけのこと。「あの人は不実だ、嘘付きだ、裏切り者だ」と叫ぶのは、「恋愛」の場合に限ってのこと、「お知合い」ではただ「また新しいお知合いが出来た」と言うだけです。「恋愛」だけが、両親の悲痛な叫びの余韻を残して家族の絆を引き裂いたその揚句、我々の生活のあらゆる隅ずみ迄を絡め取って、結婚するより外に逃げ道を失ってしまうこともしばしばですが、「お知合い」では日曜毎で充分、長くともせいぜい謝肉祭の間くらいつき合えばそれで済みます。延々と続くなんて言うのはこの関係には縁のないことですし、ましてや一生涯続くなんて時代遅れというものです。

其の5.

Ⅱ幕5場。下着屋のお針子たちが、遠慮深いギグルの様子を、菫の花に例えたのに対して、シュノフェルルの台詞を借りて、ネストロイ得意の混ぜ返しが入る。

これは、別に知らなくても理解出来ないということではないが、菫はドイツでは、春を告げる使者として、バラと並んで最も愛されている花である。さらに、内気、清純さを表す花でもある。

Schnoferl. Erlauben Sie, daß ich gegen das unverdiente Renommee dieser Blume einen

Einspruch tu'. Das Veilchen drängt sich z' allererst hervor, kann's kaum erwarten, bis 's Frühjahr wird, überflügelt sogar das Gras, damit's nur ja früher als alle andern Blumen da is auf 'n Platz - wo steckt da die Bescheidenheit? Aber 's geht schon so, so kommt auch mancher Mensch zu einem Renommee, er weiß nicht wie. Weltlauf! [22)]

シュノフェルル：こう言っては何ですが、その評判は分不相応と言うものでしょう。スミレは、春になるのも待ちきれず、我先にと押し合いへし合い顔を出しては、雑草さえも凌いで外のどんな花よりも早く辺りを占領してしまうのです。いったいこの花のどこに慎ましさがあると言うんです？　しかし、そういうこととなれば、人間にしたところで、やっぱりそうやって評判を勝ち得るんです。どうしてでしょうか。それが、世の中なんですよ！

其の6.

これは、ちょっと気の利いた言い方という程度のものだが、Ⅱ幕15場。テクラのことを忘れさせようと、折角ギグルを場末の娘たちの所まで連れ出したのに、偶然そこにテクラがやって来てしまった。そこで、シュノフェルルの言う台詞。

S c h n o f e r l. Ich führ' ihn her, daß er s' vergißt, und der Zufall führt s' her, daß s' ihn wieder dran mahnt! Ah, ich sag's, der Zufall muß ein b'soffener Kutscher sein - wie der die Leut' z'samm'fürt, 's is stark! [23)]

シュノフェルル：この娘を忘れさせようとこいつをここまで引っ張ってきたのに、偶然はまたこの娘を想いださせようと連れて来る。偶然て奴はまるっきり酔っぱらった御者みたいだな、思わぬ人同士を巡り合わせるんだから。こいつはやり過ぎだよ！

○分類3．ヴィーン事情。

其の1.

ネストロイが活躍した頃のヴィーンは、まだ市壁に囲まれた中世以来の形をもっていた。しかし、19世紀も中頃になると、近隣の町や村から集まってきた流れ者たちが壁の外に旧市街を取り巻いて住み着き、次第にドーナツ状の街、いわゆる場末（Vorstadt）を形成していった。だが、旧市街と場末の街との間には、いわば干渉地帯として、まず堀があり、其の外側には居住を許さない芝を植えた地帯があった。これが、以下に出て来る Glacis（グラシ）であった。市壁は現在取り壊されリングと呼ばれる環状道路に、グラシはおもに、それに沿った公園となっている。

シュノフェルルに場末で女の後を追っていたのを見かけたといわれたカウツの弁解。

K a u z. Der Stadtgraben bildet die Grenze von meinem Herzensrevier', und noch nie hab' ich meine Leidenschaften über a Glacis getragen.[24)]

カウツ：わしの心の縄張りは、お堀が限界だ。わしの情熱は未だかつてグラシを越えて外まで出

たためしはない。

其の2.

以下はお菓子について。下着屋の二階で開くことになったパーティーに、シュノフェルルが焼く菓子、Guglhupf。これは特にヴィーン固有の物ではないが、この呼び方はとりわけヴィーンで好まれる。Gugel は、僧帽、Hupf または Hopf は、Hefe (酵母)、つまり、帽子の形をしたカステラという意味だという説もあるが、本当の所はよく分からない。それはともかく、日本でも最近はこの菓子を見かけるようになった。ちなみに、呼び方は、「フグロフ」。原語をローマ字読みすればグーゲルフップ或いは、グーグルフップだが、確かにヴィーン訛ではフグルップに近く、なるほどと感心した。

M a d a m e S t o r c h. Vorderhand is man über einen Gugelhupf einig.
S c h n o f e r l. Und ich werde diesen Gugelhupf ins Leben treten lassen.
M a d a m e S t o r c h. Schön, Sie haben darin eine eigene Geschicklichkeit.
S c h n o f e r l. Dauerhaft mach' ich's wenigstens, nach drei Tagen muß man's noch g'spüren, wenn man von mir ein'n Gugelhupf gessen hat.[25)]

マダム・シュトルヒ：さしあたり、フグロフで一致しました。
シュノフェルル：それでは、私がそのフグロフに命を与えてやりましょう。
マダム・シュトルヒ：素敵！あなたは、それにかけては独特の腕前をお持ちですもの。
シュノフェルル：少なくとも手間暇だけはかけてますからね。私のフグロフを食べたら、三日たってもまだ味が忘れられませんよ。

其の3.

ネストロイは、何かを比較するとき、たとえとしてよくヴィーンの地名を引合いに出す。たいていは、高尚、崇高なものに対する卑俗なもののたとえである。以下、その例を二つ。

トュルケンシャンツェは、現在のヴィーン18区にあるほんの小高い台地。

G i g l. Ich heirat' s', ich seh' nicht ein -
S c h n o f e r l. Eben weil du nichts einsiehst, willst du s' heiraten und eine andere aufopfern, die so hoch über dieser steht wie die Zeder übern Petersil, wie die Giraff' über der Wildanten, wie der Himalaya über der Türkenschanz'![26)]

ギグル：僕はあのひとと結婚する。ほかのなんか目に入らない・・・
シュノフェルル：何も目に入らないからこそ、あの娘と結婚したがって、それに比べりゃパセリに杉の木、野鴨にキリン、トュルケンシャンツにヒマラヤくらいも格の違う女を袖にしようなんて思うのさ。

今度は、ナッシュマルクト。カール広場から南へ、ヴィーンツァイレに沿って延びる食料品の

市場である。ここでは崇高なオリンポス山に対する非常に卑俗なものとして引合いに出されている。

S c h n o f e r l (*für sich*). Ha, das Weib ist ein Stern erster Größe, und ich Stockfisch hab' sie einer kleinlichen Rachsucht fähig gehalten, die mit ihr einen Kontrast bildet wie der Olymp mit 'n Naschmarkt! [27)]

シュノフェルル：(自分に)なんと、この女は一等級の星なんだ。それを、この俺様の馬鹿頭は卑小な復讐欲しか頭にないものと思っていたんだ。そんなものこそこの人に比べりゃオリンポス山とナッシュマルクト程もかけはなれているのに。

其の4.

次の例は余りにも突飛なもので、レクラム版の注を見ても初めは何の事か分からなかったものである。

紙入れがカウツの物と分かって、ようやく謎の解けてきたシュノフェルルの台詞。

S c h n o f e r l (*für sich*). Ihm g'hört die Brieftaschen? - Ha, Stearin-, Milly-, Apollo-Licht, was mir aufgeht -! [28)]

Stearinlichtはステアリン蝋燭、Milly-Kerzen はフランス人ミリの改良したステアリン蝋燭、そして、Apollo-Licht はかつて有名な遊戯場だったアポロホールを改装した工場で作られる蝋燭で、その品質は最上とされていた。つまり三つの名詞の関係は、丁度形容詞の原級、比較級、最上級にあたると考えられる。従ってこの台詞の意味は、

シュノフェルル：(自分に)この紙入れは彼のだって？そうか、段々はっきりしてきたぞ、何てことを思い付いたもんだ！

○おわりに

いままで見てきたものの外にも、実はもっとたくさんの取り上げるべき箇所があるが、細かいものまで逐一上げ尽くすことは量的にも不可能であり、またその必要もないと思われる。代表的な例は一応挙げたつもりであり、後は実際の翻訳を通して工夫して行くこととしたい。

注

テキストとしては、レクラム版（JOHANN NESTROY: Das Mädl aus der Vorstadt oder Ehrlich währt am längsten. Posse in drei Akten. Stuttgart 1968）を用い、適宜批判版全集第11巻（Johann Nestroy Sämtlishe Werke. Historisch=kritische Gesamtausgabe. Herausgegeben von Friz Brukner und Otto Rommel. Band 11. Wien 1928.）を参照した。そのほか使用した辞典類は最後に参考文献として一括して挙げることとした。

1）コンスタン・ミック著『コメディア・デラルテ』(梁木靖弘訳)未来社、1987年。

2) Nestroy: Das Mädl aus der Vorstadt. Stuttgart 1968. S 5.
3) a.a. O. S. 6.
4) a.a. O. S. 18.
5) a.a. O. S. 29.
6) a.a. O. S. 19.
7) a.a. O. S. 26.
8) a.a. O. S. 37.
9) a.a. O. S. 38.
10) a.a. O. S. 43.
11) a.a. O. S. 43.
12) a.a. O. S. 54.
13) a.a. O. S. 59.
14) a.a. O. S. 73.
15) a.a. O. S. 74.
16) a.a. O. S. 78.
17) a.a. O. S. 83.
18) a.a. O. S. 16-17.
19) a.a. O. S. 18.
20) a.a. O. S. 23.
21) a.a. O. S. 24.
22) a.a. O. S. 40-41.
23) a.a. O. S. 55.
24) a.a. O. S. 18.
25) a.a. O. S. 47.
26) a.a. O. S. 56-57.
27) a.a. O. S. 77.
28) a.a. O. S. 82.

参考文献

1. Hans Hauenstein: Wiener Dialekt. Wien 1978.
2. Max Mayr: Das Wienerische. Art und Redensart. Wien 1980.
3. Julius Jakob: Wörterbuch des Wiener Dialektes mit einer kurzgefaßten Grammatik. 2. Auflage. Wien 1984.
4. Jakob Ebner: Wie sagt man in Österreich? 2., vollstandig überarbeitete Auflage. Mannheim 1980.
5. Peter Wehle: Sprechen Sie Wienerisch? Wien 1980.
6. Peter Wehle: Die Wiener Gaunersprache. 3. Auflage. Wien 1981.
7. 谷口・福嶋・福居著『ヨーロッパの森から』(ＮＨＫブックス 397) 日本放送出版協会、昭和56年。
8. 良知　力著『青きドナウの乱痴気』平凡社、1985年。

No. 34 (1989)

Über die Schwierigkeiten bei der Übersetzung der Nestroys Possen ins Japanische

Yoshihiro EHARA

Wenn man Nestroys Possen ins Japanische zu übersetzen versucht, muß man sehr viele Schwierigkeiten überwinden. Diese Schwierigkeiten sind nicht nur die allgemeinen technischen Probleme, vor denen man bei der Übersetzung der Theaterstücke steht, sondern sie bestehen auch darin, daß Nestroy in seinen Possen immer eine eigenartige Sprache benutzte. Er schrieb seine Possen immer mit Wienerisch, und zwar nicht mit alltäglichem Wienerisch, sondern mit dem, das er selber erfand, um seine Personen auf der Bühne damit charakterisieren zu können.

Nur Wienerisch ist schon ziemlich schwierige Sprache zu verstehen, nicht nur fün Ausländer, sondern auch für die Deutschen, die nicht in Wien geboren und gewachsen sind. Die Eigentümlichkeit des Wienerischen kann man in eine andere Sprache nicht richtig übertragen. Wiener Aussprache und Spezialitäten sind unübersetzbar. Aber nur aus diesen Sachen bestehen seine Possen nicht. Sie haben viel Komisches und Wahres, das wir Japaner auch verstehen können. Und es ist für uns auch möglich, nur das wenigstens ins Japanische zu übersetzen, wenn wir auch einen eigentlichen Zweck, den Nestroy erreichen wollte, verfehlen würden.

Ich habe persönlich Nestrroys „Das Mädl aus der Vorstadt“ ins Japanische zu übersetzen probiert. Hier zeige ich eine Möglichkeit, einige Wortspiele in der Posse ins Japanische zu übertragen.